

# 現代日本における青少年の疎外状況について

松 浦 孝 作

1. 問題提起
2. 考 察
3. 日本における人間疎外の現象形態
4. 社会的歴史的諸条件

## 1. 問題提起

昭和52年度の法務省による「犯罪白書」(国際的視野からみた日本の犯罪)は、先進諸外国に比して日本の治安が格段によいことを指摘して話題をまいた。たとえば1975年(昭和50年)の日本の殺人事件は、人口10万人につき1.9人であるが、アメリカではその5倍、西独では2倍余に上る。強盗、強姦などの兇悪犯罪、窃盗なども、日本では欧米諸国に比べて同じように少ない。さらに主要犯罪発生件数も日本では年々激減しているのにたいして、欧米諸国では激増しているという。たとえば殺人は1960年(昭和35年)を100とすると、1975年では日本は68人、アメリカ188人、イギリス192人、西ドイツ218人となり、日本は15年間に2/3に激減しているのに、欧米諸国では約2倍前後に増えている。強盗についても日本では1/3に激減しているのに、これらの国々では倍にも上っている。

一体、日本の犯罪はなぜ欧米諸国に比べて少ないのか。なぜ「治安が格段によい」のか。白書は次のような諸項をあげて問題を提起している。

- (1) 日本は単一民族である。
- (2) 社会階層間の文化や経済力の差が少ない。
- (3) 教育水準が高い。
- (4) 犯罪防止のインフォーマルな社会的諸規制がつよい。
- (5) 銃砲の規制のちがいがい。
- (6) 警官にたいする民衆の態度がちがう。

こうした諸点を羅列しながら、最後にほんとうのところ分らないと付言している。現場の判断を思いつくままに網羅したものの、科学的に必ずしも納得できるものではないことを執筆者自ら正直に告白しているのはよい。では社会科学的にみてこれをどう説明し理解すべきか。これが

本稿の主題である。

## 2. 考 察

まず犯罪非行などの反社会的行動は、社会により時代によって必ずしも一義的に律したり比較したりできるとはかぎらない。人間行動は社会的歴史的なものであり、国により時代によって当然これを律する尺度も規準も同じではない。法も道徳も一切の価値判断は一おう自律的に完結し統合されていて、他の時代、他の社会と切りはなされたものである。厳密な意味では他の社会、他の時代と尺度も規準もちがうから比較することはできない。日本の犯罪非行といっても藩制時代と天皇制下と今日とでは、その内容、その発生率などを軽々に比べることはできない。同じ資本主義体制といっても、日本と欧米諸国とを厳密に比定するわけにはいかない。こうした原則を考えながらも、日本人の犯罪性を歴史的に究明することは可能であるし、必要でもあろう。諸外国と日本との比較についても、先的前提を忘れてはならぬことはいうまでもない。

白書が示した主要犯罪の動向は、こうした前提をふまえながら有意差をもつと考えるとよからう。日本の犯罪統計は20才以上の「成人」であるのに、欧米各国では18才以上が大勢であること、非行統計では日本も18才～20才のハイティンがきわめて高率であることなどを考えても、白書の問題提起は重要な課題を投げかけるものといつてよい。それは現場の当事者のみならず、広く政治や経済の分野にも、とくに教育、学校、マス・コミの領域にもかかわる根本問題だと思われる。社会科学はこれに答え、究明を重ねて真相を明かにし、果して「日本の治安の格段のよさ」が喜ぶべき現象といえるかどうか確かめねばならない。それは社会諸科学の各分野に関連しており現代社会の根本問題であるから、この一文で解きほぐすことはどういできないが、問題の所在を指摘し、この重大さを示す一視点を確立して、これからの研究調査の足がかりとしたいと思う。まず白書のあげる諸項目について簡単に検討してかかることにする。

第1の「日本は単一民族」だとする点、たしかにアメリカ合衆国など多くの異民族の移民からなる国に比べれば一理ありそうだ。事実、アメリカ社会学、とくにシカゴ学派はこうした点に焦点をおいて、大都市スラムにおける犯罪非行の実証的調査研究を重ねて成果をあげた。いわゆる犯罪地帯の確定とか、マージナル・マンの構想はアメリカのみならず世界的に注目を集め、教育においても都市計画においても寄与するところ大きかった。しかし今では移民の2世\*も社会の中堅勢力の座を去って3世4世の時代となった。マージナル・マンの象徴は2世であり、3世ともなれば殆んどアメリカナイズされて安定すると期待されたのに、現代アメリカの犯罪非行は増

---

\* マージナル・マンは移民の2世に典型的にみられると考えられた。2つの異なる社会環境に同時に帰属するために、人間形成に歪みを内包するとみる。

大するばかり。いぜんとして世界一である。多民族の寄り合いは人間疎外の条件となることは否定できないが、必ずしも決定的なものとは思われない。事実、アメリカにおける犯罪非行は黒人やプエルトリコ人など、社会的経済的に疎外され差別されたものに圧倒的に多いことは周知である。

ヨーロッパ諸国はこれに比べて、いわば単一民族であることは日本とかわりがなからう。西ドイツなど戦後多くの労働力を輸入したとはいえ、高い社会保障制度によって外国人労働者やその子弟に問題が多いとはきかない。イギリスに流入したアフリカ人やインド人は貧困の故に話題になるとしても、その比率は小さく本質的に「単一民族」とみなしてよいことは日本とかわりがないだろう。中南米諸国が多く「多民族国家」であるのに、必ずしも合衆国のような犯罪王国ではないようである。

日本は西ドイツやイギリスなどに比べて犯罪発生に有意差をもつほど「単一民族」といえるだろうか。たとえば数十万に上る朝鮮人がおり、さらに多数の未解放部落民がある。朝鮮人は植民地支配のギセイとして差別され、今なお偏見をもたれているために問題を起こすことはあっても、大きな反社会的要因とは考えられない。未解放部落民についても全く根拠のない差別が反発に追いやるだけで、人種的には単一民族とみるのが通例である。要は社会的経済的差別が反社会的行動の要因となっていることは明かだろう。

次に日本では「社会階層間の文化や経済力の差が少ない」という点である。すでに法務省の白書が「中間層」の子弟の犯罪非行が急速に増大していることを重視し警告して数年になる。いわゆる中間層の捉え方が極めてあいまいであり現実にそぐわないものであることは、私も度々指摘した。(松浦「人間の社会的構造と疎外」第3章参照) 前回の国会選挙以来、中道派の抬頭とか中間層意識とかがマス・コミをにぎわして、日本の社会階層の実態を見過っている傾向の反映が、こうした指摘となっているのではないか。これは経済学、社会学など社会科学がもっと本格的に究明して真実をとらえるべき根本問題だから、ここで深く立ちいることはできない。前記の著書でも(第3章) 私は最も信頼すべきデータと思われるものを2, 3あげて考察したところをまとめてみよう。現代日本の階級構成を示す1つの資料として総理府統計局の「就業構造基本調査」(昭和40年) から算定すると、就業人口4,500万について資本家階級(及びこれに準ずるもの)は6.5%, 労働者階級(及び失業者を含めて)は56.2%となる。この中間にある自営業者層は一次産業25.2%, 勤労市民12.9%である。しかし一次産業人口も富農中農(約5%)を除けば20%弱が貧農及び農業労働者である。勤労市民も使用人を抱えるものは3.2%にすぎず、約10%は1人または家族労働に頼る小企業となる。その後の「世界に例のない」経済成長によって、農民及び中小企業がどのような推移をたどったかは、次の数字でうかがいしられよう。

	S. 30年	S. 35年	S. 40年	S. 45年	S. 50年
労働力人口	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
労働者階級	43.6	50.5	56.9	60.1	65.0
自営業者	53.2	45.7	38.3	34.8	29.4
資本家階級	2.0	2.7	3.6	3.9	4.2
警官など	1.1	1.1	1.2	1.2	1.4

これは国勢調査の結果から試算したものであり、他の多くの資料の中でも極めて注目される傾向である。ここにみられるように、中間層といわれるものをほぼ代表する自営業者は過去20年間にほぼ半減して労働者階級に転じたといつてよい。この経過は昨今の経済状況からますます拡大されることは疑いない。これら国民の2/3に上る労働者階級の6割が中小企業の未組織労働者であることも注意しなければならぬ。比較的恵まれた4割の組織労働者でさえ、相つぐ労働条件改善の闘いにもかかわらず物価の上昇をカバーするにいたらず、妻子のパートや内職で息をつないでいる状態である。ホワイト・カラーの実質所得も戦前の半分、よくて3分の2といわれる。6割の中小企業労働者が困難な生活水準にあることはいうまでもない。日本の賃金はがいてアメリカの1/10、イギリスの1/3以上、西ドイツの半分以下といわれて久しい。異常な経済成長や外貨の累積黒字などは庶民には縁はない。倒算件数の記録更新が毎年伝えられる中小企業や、ノー政に一揆も辞しかねない農民などの自営業者の苦境はいまさら一々いうまでもない。

ローントゥリーの第1次貧困線(極貧層)にあるものは、全国民の25%から30%といわれ、憲法のいう健康にして文化的生活に恵まれたものは大都市で30%、地方都市で20%と報告されて久しい。(労働科学研究所報告)つまり国民の約50%は第2次貧困線にあるとみてよい。家族員それぞれ零細な所得をよせ集め、家計をやりくりしてなんとか体裁をととのえているのが約半数をしめており、これが「中間層」の実態である。その後のきびしい経済状況はすでに示したように、これら中間層をどんどん第1次貧困線に突き落しているのだ。これは欧米の各国においても報告されている生活水準の実態である\*。

大衆社会論のうけうりで、今や全国民は衣食住のすべてにわたり画一的な大量生産物で生活しており、マス・メディアも一様化して階層間の格差が消失し、アトムに転化しつつあるなどという表面的な皮相な見方を強調することで、階層差をぬりつぶすわけにはいかない。まして国民の生活水準の帰属意識調査など(総理府調査)を拠りどころに、90%までが中間層化しているなどと思ひこんだり、言いふらしたりする愚は科学的態度ではない。社会階層の格差は文化的にも経済的にも増大するばかりであり、資本主義体制のいかなる国にもこの鉄則は貫徹している。ここに人間疎外の根源があるとみななければならぬ。これは重要な問題であり、社会諸科学が相携えてさらに確かめる必要があり、ここに示した数字は1つの参考資料と考えていただいてよい。いずれ

\* ガルブレイスを批判したコルコの著作その他。また朴政権下の韓国でも0.3%の富裕層が国富の43%を占有し、所得税も課されない貧困層が68%に上るといふ指摘があるという。(月刊中央=韓国誌)

にしても日本の社会階層間の格差が文化的にも経済的にも、欧米諸国に比して小さいなどといえる科学的根拠はない。いずれの資本制社会においても格差はますます増大しつつあり、社会不安は激化するばかりである。まさに人間疎外の根源となっている。

第3に「教育水準の高さ」について一言しなければならぬ。日本の教育がアメリカやイギリス、ドイツなどに比べて、水準が高いという真意は必ずしも明かでない。義務教育の普及度か。中等教育の中味か。大学教育のレベルなのか。いずれにしても久しく師と仰いだこれら先進諸国に比べて、「治安の格段によい」成果をあげうるほど、日本の教育水準が高いと考える根拠は何だろうか。義務教育の普及率に有意差はあるとは思われない。中等教育（主として高校）への進学率は或は少々日本が高いといえる国があるかもしれない。大学生の比率や絶対数は、しばしばアメリカについて高いと誇示する人もある。しかし遺憾ながら今日の日本の高校生も大学生もその大半は、ただ名のみ形だけの学生であり、形だけの卒業生である。能力もなく意欲ももたず「学生」の身分を装うて遊びくらし、ふしぎに「卒業」してそれが通用する「学歴社会」である。こんな教育内容や水準が「治安のよさ」にどうつながるかは重大な問題であろう。三無主義やロボットに追いこんで無為らんだの少年や若者に「教育」することは、まさに治安のよさに寄与するところ大きからう。この点、あとで再びとりあげることにする。

犯罪防止のインフォーマルな社会規制は藩制時代や専制国家の隠湿な常套手段であったが、天皇制絶対主義の下でも久しく巧みに利用されて威力を発揮した。戦後の家族も地域共同体も、はげしい変容にさらされて今は犯罪非行のきわめて少ない山間僻地に残存するくらいで、これが全国の犯罪統計にどれだけひびくか殆んど考えられそうもない。「警官にたいする国民の態度のちがいがい」も、お上のご威光を笠にきた昔の専制主義の名残はきえてはいないだろうが、犯罪防止にどれだけ役立っているか。「治安のよさ」が欧米と格だんによい条件とは考えられない。「銃砲の規制のちがいがい」は、たしかに強悪犯の激発を防止しているかもしれないが、大多数のその他の犯罪非行とはつながるところはないだろう。

要するに、こうした流布された迷論や現場の思いつきを羅列しても、「ほんとうのところ分からない」のが真実だろう。正直にそう付言しているだけ誠実さを認めてよい。では、その真相は何なのか。

### 3. 日本における人間疎外の現象形態

人間は社会的条件によってその生活が脅かされたり生存の危機さえ感じるときは、不安と苦悩にあがき、もたえ、なんとでも生きる窓口を求めて必死に抵抗する。多くは無我無中、水に突きおとされた小猫のように疲れはて水を飲んでアップ アップする。僅かに泳ぎを心えたもの

だけ、水に浮き四囲の状況を見渡して安全な岸辺や舟に泳ぎつく。人間疎外は一定の環境における危機からの脱出にたとえてみれば分りやすい。ただもがき、あがく衝動的な短絡行動と、この危機を洞察し克服しようと合理的に全力を投入するものと様々である。危機の条件を自己の外に求めて、これに抵抗し挑みかかるものは、反社会的行動である。自己の内部にその条件があると教えこまれ信じきって苦しみ、もだえ、絶望し、情緒障害に陥り自殺に走るものさえあるが、これは非社会的行動といってよい。それはあくまで類型であり、現実には互いに錯綜し連がりあっていることが多い。反社会的行動と非社会的行動はいわば疎外の二面であり、表裏一体の関係にある。いずれも病理現象とみなされ異常行動といわれるが、それは程度によってはだれにも経験したり内在するもので、疎外は本能的にすべての人間の正常な行動にも伴うものである。疎外をモメントとして人間行動が生まれ生存が確かめられ、創造的活動として実を結ぶことも忘れてはならない。ただもがき、あがいて溺れ死んでしまう（非社会的行動）のではなく、泳ぎの心得で水に浮き、四囲を見渡して安全な場に泳ぎつくのは疎外克服の例と考えてよい。

犯罪や非行のごとき反社会的行動と情緒障害や自殺などの非社会的行動は、人間疎外の二側面を示す類型であることをのべた。人間疎外は人により社会的条件によっていずれかの側面に傾き、どちらかの類型に偏って発生する。欧米では反社会的行動に傾くのに、日本人はむしろ非社会的行動に偏しているのではないか。同じ資本主義体制でありながら、そのうみだす疎外は社会的歴史的諸条件によってその現象形態にちがいを生じていると考えたい。ルネッサンス以来のヒューマンイズムが、とくに名誉革命やアメリカの独立、フランス大革命によって社会的政治的経済的に結実して300年の歴史を積み重ねた欧米諸国と、明治の天皇制絶対主義から解放されて半世紀にもみたくない日本との、社会的歴史的相異の当然な現われと考えてよからう。

日本の青少年を蝕む非社会的行動は深刻なものがある。小中学生の段階で無責任、無関心、無気力などという三無主義が問題になってすでに久しい。今や高校生から大学生、職場の若い世代を通して世を風靡し、憂うべき退廃を生みだしている。麻薬、アルコール、麻雀、女子中学生高校生の売春などが、親も教師も知らぬまに広がって手のつけようがない。恐るべき心身の荒廃が進行している事実を政治屋教育屋は知るよしもない。

まず現代日本の青年における疎外の非社会的傾向が、欧米に比べてどんなちがいを示すかみてみよう。総理府が1972年から始めた青少年(18~24才)の意識調査の結果がある。これは欧米諸国と東南アジア諸国11ヶ国の青少年について同じ質問用紙で回答を求め、日本と各国とを比較した結果である。第2回調査(1977年=昭和52年)の関連項目にかぎって一部引用してみよう。青少年が家庭、学校、職場、社会にたいして不満を示す比率は日本が最も高く41%に上り、フランス(39%)を除いて欧米諸国をはるかにぬいて倍近くにもなっている。また不満の内容は「なんとなく……」「気に入らない……」「イライラする」などと情緒的ないらだち、不安を表明するだけで、知的合理的分析や説明のないのがきわだっている。当然ながら、これに対処する構え、解決

策もきわめて消極的、個人本位の次元をでない。選挙権の行使をいうものは限られており、大多数は「個人の力ではだめ」とか「社会のことにはかかわらない」とか、逃避型、無関心を示しているのが著しい相違を示している。その生きがいは余暇であり、遊びであり、自分の趣味であり、マイ・ホーム主義となる。そこには悲しい諦め、忍従、逃避、シラケが側々とせまるものがあり、明治大正期の大臣大将という立身出世主義は影をけししながら、藩政時代の部屋住みの姿、農村のオンチの姿一色にぬりつぶされてしまった青少年は、まさに異様ではないか。同じ資本制社会の人間疎外に蝕まれながら、これと真向から対決し改革の理想を掲げて気負う欧米諸国の青少年と、対照をなしていることは注目すべき実態ではないか。

すでにのべたように、中学生の三無主義が話題に上ってから久しく、やがて高校生、大学生から若手社会人にまでそれが及んでいることは、いろんな場で指摘される通りである。長年、いろんな大学の学生と接してきた経験からも、この若者たちは何を求め、何を眼ざしているのか理解に苦しむことが多い。ただ1ついえることは単位がほしい、卒業証書がほしいというだけである。知識を求め、技能を修めて人々の幸せのために働きたいなどは素振にもみえない。能力もなく意欲もなく形だけ学生を装うて、ただ遊び呆けて暮している。スポーツやサークル活動などに打ちこむものもごく一部で、大部分は応援団のワンサ組。暴力やケンカなども影をけて陰湿な宦官のうごめきだけ。人間でも生命でもなく木石に成りはてた感じで、若々しさのカケラもない。一体なにがそうさせたのか。魔法の杖は何なのか。小学校の低学年までは生々した子どもらしさが失われていないという。学校教育、受験戦争などもあろうが\*、根源は現代資本制社会の人間疎外であり、日本の特異な社会的歴史的条件ではないのか。西欧やアメリカとちがう政治の風土ではないのか。これらの考察は後でとりあげるが、以上にみられる非社会的傾向や行動が日本の青少年を骨抜きにし、ゲルにかえてしまったことは否定できない。反社会的行動におもむく構えも、用意も、エネルギーも失いつつあるとあってよい。

こうした傾向はすでに小中学生にも現われている。総理府が今年(53年)7月、国際児童年事業推進会議に提出する資料として、全国小学生5,6年と中学生総数5,000人にたいして行った意識調査でも、同じような傾向がみられることを一言したい。将来の暮らしについては「趣味にあった暮らし」「楽しい結婚生活」「その日その日をのんきに」など小市民的志向がほぼ半数で、金もちとか、有名人とか、「社会のために」などはごく少ない。職業についてもきわめて現実的で、それだけ健実ともいえそうだが、根は夢をもたぬシラケの萌しではないか。すでに竹馬の友ともいうべき友情のつながりは、いまの青春期、青春前期に奪いさらわれて、人間形成にひびが入ってきつつあり、孤独感、焦燥感にさいなまれてマイ・ホーム主義に傾かざるをえないのか。友情の絆が正しく根をはる場が失われてしまっている。社会的な眼を開く格好の窓ながら、青春前

\* 相つぐ教育改革によって、新教育制度発足当初の理想は今や殆んど消えうせた。とくに「社会科」においてそれが最も著しい。前記拙著参照。

期にすでにこの窓は閉ざされているのだ。

こうした傾向から当然のことと思われるが、精神障害、とくに情緒障害の増大は顕著な社会問題になっている。精神病のふえていることは統計的にも明かであり、ストレス過剰によるノイローゼは国民の大多数に広がっているといつてよい。現代社会では90%以上が、程度の差はあれノイローゼに苦しんでいるとさえいわれている。いたましいのは子どもの学校ぎらい、家庭内暴力の激増だろう。子どもはもとより、親も教師も精力を使いはたしている例は少なくない。自閉症といわれる子どもにも、家庭環境などの問題がからんでいるものがあることは医家の指摘するところだ。こうしたノイローゼや情緒障害のいたましい破局は、自殺や親子心中につらなることが多い。

日本の自殺率は国際的にも久しく高いといわれてきた。最近のWHO統計では(1973年)第9位だが、西ドイツとほぼ近いだけでアメリカ、フランス、イングランドなどより高い。一々数字はあげないが、日本の特徴は女性の自殺率が高いこと、また15~24才の青少年で高いことである。青少年女子の自殺率はしばしば世界一であった。最近、小中学生など年少の自殺がマス・コミにぎわしているが、子どもの自殺や若い女性の自殺は、日本の社会的歴史的諸条件の特質につらなる疎外現象として注目される。昭和50年の年令別死因順位では、女子の15~29才までの5年づつの死因のトップは自殺である。男子は同じ年令期では自殺率は女子より高いが、それぞれ死因の2位をしめている。ついでながらこの年令期の青少年男子の死因の第1位は、いずれも「不慮の事故」である。青少年の自殺はまさに戦前の結核であり、ガンに劣らぬ重大問題である。

人間疎外は日本においては非社会的行動として現われる傾向の強いことは、以上の管見からも認めてよかろう。三無主義、退廃、脱サラ、家出、麻薬、アル中、女学生の売春から様々な情緒障害、自殺まで、とくに現代の顕著な風潮であり、男も女も、大人も子どもも、これにまきこまれて欧米諸国を上まわる重大問題となっている。

こうした傾向は疎外の他の側面、反社会的傾向にもみられる。ここ10年来、とくにマス・コミを賑わした青酸コーラ事件、毒入りチョコ事件、予告づきの爆発物のしかけなど、不特定多数の社会人を敵視する事件が相ついでいる。それらの多くは犯人検挙にいたらないまま、これをまねて流行にさえなっている。小さな村などでは足がついて犯人は上ったが、屋敷の境界で長い争いのつづいた怒と恨みの報復だったらしい。大都市や人間の密集地、乗物などでは迷宮入りが多い。放火も昨年(S.52年)で火災原因の第1位になり(東京)、放火自殺はここ10年来倍にふえたという(全国)。これら不特定の社会人にたいする犯罪の比率は欧米諸国と比較することはできないが、現代日本人の疎外の特異な傾向として注目される。パターンとしては反社会的行動に入るが、多分に非社会的行動と近い性格をもつことは明かだろう。

以上、現代日本における疎外の非社会的行動の概要を概観して、とくにそれが女性や子ども、青少年、学生に顕著にみられることを指摘した。そのあるものは国際的比較によって、アメリカ



や西欧諸国よりも著しい高率を示し、日本の特異な傾向と断ずることができよう。同じ高度の資本主義国家といいながら、人間疎外の現象形態にこうした歪みが生ずるのはなぜであるのか。くり返しいうが、これは社会科学の巾ひろい協力をまたねば究明できる問題ではない。同じ資本主義体制といいながら、日本とアメリカ、イギリスなどと全く画一的に分析できるものではないように、こうした人間疎外の現象形態もこれを規制する複雑な諸条件のちがいがあろう。以下、その社会的歴史的諸条件について、1つの試論を提出して大方の批判を仰ぎたいと思う\*。

#### 4. その社会的歴史的諸条件

周知のように欧米諸国ではルネッサンス以来すでに400年にわたって、人間解放が叫ばれ人権思想が広く浸透している。困難な戦をへながらルネッサンス・ヒューマンイズムは自由主義をうみ、社会主義を育て、民主主義を確立して現代にいたった。近代国家も資本制社会も、その理想として実現して200年から300年を経過した。人間尊重といい人権思想といい、生活の隅々に浸透して疑をいれない公理となっている。たとえばマッカーシーの赤狩り事件にたいしても、ニクソン大統領の陰謀と腐敗にたいしても、徹底的な追究、究明をつみ重ねてその黑白を決し責任を糺した。ロッキード事件や金大中事件その他で、歯ぎれのわるい政治的結着でお茶をにごしている日本の風土とまさに格だんのちがいである。同じ資本主義制度といいながら、様々なちがいが内包されているように、政治的社会的にも一律に自由主義国家とか民主主義社会とわりきれないものが多分に認められる。いま1つ1つ列挙したり検討したりする場ではないが、基本的には資本主義のメカニズムに発する人間疎外も、欧米と異なる社会的歴史的条件によってその現象形態を異にするのは必然のことだろう。

日本は明治維新以来、1世紀をわずかにこえた段階である。しかも天皇制絶対主義をぬけだして30数年にしかない。新憲法や教育基本法など掲げながら、封建遺制の深い泥沼と絶対主義の強力な余波がことあるごとにこれをぬりつぶし埋めかくしてしまおうとする。人権思想、民主主義は戦後ようやく定着しかけたとはいえ、まだまだ人々の心の底まで浸みとおっているとはいえず、生活のあらゆる場に確立したとはいえない。久しい伝統の衣をぬぎかえる脱皮の苦悩から容易にぬけだせない。藩政時代の武士道精神の象徴ともいべき切腹は、絶対主義下にも美化されて軍人兵士ばかりでなく、自己ギセイの現れとして現代にも共鳴する傾向はつよい。身分のちがいに引きさかれた男女の愛は、天国で結ばれることを信じて心中の破局となることが多かったが、その讚美と共感は今現代日本人にもつよく残っている。離縁や生活の危機に絶望した若い母

---

\* 衆議院選挙における20代の青年の棄権率も東京で44%、大阪で42%あり、全国平均投票率でも青年層は10%低いという（昭和44年）。その後の発表はないようだが、これもひとつのデータとなろう。

が、自分と一体感をもって幼な児を道づれに死ぬことは、昔も今も同情し理解できる人が多からう。現代の自殺率を市部郡部別にみると概して都市が高く、職業別にみると農業者が最も高い。農業者は林業や水産業に比して2.5倍もある。(昭和35年)農奴が封建体制から絶対主義の下を通じていかにきびしい搾取にさらされたか。そのひづみが女性や嫁にまでいかにシワよせされたか。そうした長い伝統的風土がとくに農民層になお強く残存している証しではないか。今なお庶民の信仰あつい湯殿山の即身成仏は自己ギセイの極致であろう。前世の因果と諦めて、ひたすら死後の極楽往生を祈りながら苦悩に耐えしのぶ生きざまは、藩政時代から明治大正をへて今も庶民の中に受けつがれている。盆栽や庭木いじり、俳句や短歌の趣味は西洋人の驚くばかりの、みみっちい、いじらしい方寸の天地に首をすくめて生きる諦めめの境地である。智に働けば角がたつ、情に竿させば流されると観じて画にのがれ芸術に生きようとする漱石の心境も、文人趣味を色こくうけついでいる。あたかも西欧の芸術至上主義と形においては相通じるが、確乎たる自由主義、個人主義に根ざした典型的な芸術至上主義に接しながら、漱石はこれを文人趣味の上塗りとして学びとったとみられる。いわゆる大逆事件などにみられる絶対主義の暴圧の下で、僅かに自由主義の命脈をうけつぐかにみえる高踏派の芸術論も、封建体制以来の超俗の俳諧趣味を核とするものであったことを忘れてはならない。荷風も、鷗外も本質的に同じ根をもっているとみなしてよからう。山頭火風の生きざま、俳諧趣味が若い人々に共鳴される風景は、現代のきびしい逆流の中にいかに根づよく封建遺制が生き残っているかをしる証しといってよい。庶民は100年前も今も父や祖父のシワ1つそのままにうけついだ顔だちで、ドス黒い封建遺制の泥沼にどっぷり埋もれている現実を直視しなければならない。家族関係にも、地域共同体にも、学校にも、ぬきがたい力でこの泥沼がへばりつき、すべての人間関係をねじまげている。基本的人権も、主権在民も、農地改革も、選挙も雲の上の絵そらごとで、これが地上のわが身の問題と定着していないのが実相である。封建体制そのままともいえる諦めと忍従と逃避が深く残っている。子どもや若者はこれに反発し嘲笑するが、年とるに従ってメッキははげ、化粧はおちて親や先祖そのままの顔だちに老いこんでいく。こうした風土の中に人間疎外は非社会的行動として現われる根源がある。村や町には犯罪非行は少ないといい桃源郷だと誇るが、それは警察統計の上の話。日本の現実、全国をあげて農村の風土を濃淡さまざまながら内包していることをしらねばならない。

日本の治安が欧米諸国に比して格段によいと考える政治屋や教育屋は、統計の限界をしらねば足をすくわれる。日本にも百姓一揆があり米騒動があった。人間疎外の本質を見きわめて、そのダイナミックスを正しくとらえねばならない\*。

\* 人間疎外概念について、ことにその2つの側面、つまり反社会的行動と非社会的行動については詳しくのべることはしなかった。前記「人間の社会的構造と疎外」をみていただきたい。

なお土居健郎、「甘え」の構造、昭和46年には第4節社会的歴史的諸条件に関連する所説が多い。「甘え」の論理には必ずしも同調しがたいが、稿をあらためて詳しく検討したい。